

# ある夜の姉と弟

小川未明

青空文庫



ある日のこと、義夫は、お母さんにつれられて町へいくと、露店が並んでいました。くつしたや、シャツなどを拵げたのや、バナナを積み上げて、パン、パンと台をたたいているのや、小間物を並べたのや、そうかと思うと、金だらいの中で金魚を泳がしているのや、いろいろでありましたが、あるところへくると、ちやうど自分くらいの男の子が、集まっている店がありました。それは、やどかりのはいった、箱をごぎの上へ置いて、売っているのです。やどかりは、小さなはしごの上へ登ったり、たがいに組み打ちをやったり、転げ合ったりしていました。どれも脊中にかわいらしい貝を負っている、歩くときは、かにに似た不思議な虫でありました。いったいどこから、持ってきたのだろうか、義夫は、しばらくお母さんと立ってながめていました。

「あんな大きいのがいるよ。」と、このとき義夫は、目をみはりました。そのやどかりは大きな白いとげのある貝を負っていました。「よくあんな大きな貝を負って歩けますね。」

「おばさん、こんなどこにいるの。」と、きいた子供があります。義夫は、自分も心にもう思っていたので、いいことをきいてくれたと思いました。

「この白い大きいのは、小笠原島からきたのですよ。みんな、遠い南の方からきたものばかりです。」と、やどかりを商うお婆さんは、いいました。

小笠原といえ、ずっと南のやしの木が茂る熱帯の地であると思ひました。

「お母さん、あの爆発した三宅島より、もつと遠いんですね。」と、義夫は、いいました。

「僕、ほしいな。」

「およしなさい。家へ持つて帰ると、じき死にますからね。」と、お母さんは、困つたようなお顔をなさいました。

それでほかの学用品など買つてもらつて、家へ帰つたけれど、やはり、やどかりの姿が目に残つていました。また話が耳に残つていました。

「どうしてやどかりに、こんないろんな形があるの。」と、ほかの子供が、きいたら、

「やどかりは、自分の好きな貝がらをさがして、幾度も、幾度も、その中へ入つてみて、気にいったのを自分のすみかとするのだそうです。」と、お婆さんのいったことなどが思ひ出されたのでした。

義夫は、お姉さんをお願いして、買つてもらおうかと思ひました。そのうちに、晩方

になると、幾度も時計を見上げて、もうお姉さんはどこを歩いているだろうと空想しました。そして、お姉さんが、お勤めから帰ってくると、

「お姉さん、僕に、やどかりを買ってくれない？」といって、頼みました。

「町に、売っていたの？」

「うん、お姉さん見たのかい。」

「見ないけれど、明日の晩にいつて買つてあげましょうね。」と、お姉さんは、答えました。

「お母さん、お姉さんに、やどかりを買つてもらつていいでしょう。」と、義夫は、ききました。

「買つてくださるなら、おもらいなさい。けれど、じきに死にますが、かわいそうでない？」

「塩水に入れておけば、生きているよ。」

また、一日はたちました。そして、今日も太陽は、昨日の夕方のように、雲を赤く染めて西の空に沈みました。

「お姉さんは、まだ帰つてこないかなあ。」と、義夫は、外をながめていました。

「義夫、お姉さんは、疲れてお帰りなさるんだよ。お湯に入つて、ご飯を食べてからにしないさい。」と、お母さんは、自分かつてであつてはいけなないと、おしかりになりました。お姉さんは、元氣よく、いつものように、朗らかな顔をして、お勤めから帰つてきました。

「義夫さん、お湯へ入ると、もう外へ出たくないから、これから、いつしよにいつてきましよう。」と、昨日の約束を忘れずに、いわれました。

「すぐ、いつてもいいの。」

「ええ、まいりましょう。」

「約束を守つて、お姉さんはえらいなあ。」

「だれだつて、お約束は守らなければ、いけませんよ。」

姉と弟は、出かけました。燈火がついて、町はにぎやかでした。

「あのおばさん、きているかしらん。」

しかし、その日は、縁日で、いつもよりかいつそう露店も人出も多かつたのです。やどかりを売るおばさんは、いつものところで店を出していました。子供たちは、昼間

よりかたくさんいました。

けれど、義夫のほしいと思つた、あの白い大きなやどかりは、姿が見えず、売れてしまつたのです。お姉さんからほかのを買つてもらつたが、がっかりしてしまいました。

義夫は前を向いて、さつさと歩きました。気がついてうしろを振り向くと、お姉さんは、かくれてしまいました。

「なにしてんだらうな。」と、やどかりの入つたブリキかんを下げながら、つぶやきました。やつと追いついたお姉さんは、

「義夫さんは、現金ね。ご用がすむとさつさと歩くんですもの。」

「お姉さんがのろいのだい。」

けれど、義夫は、このとき、自分のことしか考えぬ自分がなんとなくさびしく感じられました。町をはずれて、たんぼ道へさしかかりました。

「あの青い火はなんだろう？」と、ふいに義夫は、立ち止まって、怖ろしそうに、ささやきました。

「なんでしよう、子供がいたずらしているのよ。」

青い火の方へ近づくと、だれか、きゆうりの実をうつろにして、内へろうそくをともし、煙の中へ立てておいたのです。二人が笑うと、

「お化<sup>ば</sup>けだぞう。」と、野菜<sup>やさい</sup>の茂<sup>しげ</sup>った間<sup>あいだ</sup>から勇<sup>ゆう</sup>ちやんの声<sup>こゑ</sup>がしました。  
あたりは、すっかり暗<sup>くら</sup>くなって、さらさらと風<sup>かぜ</sup>がどうもろこしの葉<sup>は</sup>を鳴<sup>な</sup>らして、  
頭<sup>あたま</sup>の上<sup>うへ</sup>には、星<sup>ほし</sup>の光<sup>ひかり</sup>が、きらきらと輝<sup>かがや</sup>いていました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「ある夜《よ》の姉《あね》と弟《おとうと》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ある夜の姉と弟

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>